

第2章 観光と宿泊施設について

2-1 観光について

ここではまず、人間がなぜ観光という行為を行うのかについて、観光心理学の側面から考察していく。

2-1-1 観光とは¹⁾

観光とは、日ごろの日常的な生活を離れて「非日常的な経験」をすることである。つまり、日常性を離れて、非日常性の空間や時間を経験する事であるといえることができる。このような、日常性と非日常性との関係で生まれてくるのが「離れる」ということである。日ごろの日常的な生活や仕事から非日常的な観光へと移行するには、日常的な生活空間から「離れ」なければならない。「離れる」という行為によって、日常性から非日常性を作り出すことができるのである。

では、なぜこのように日常的な生活を離れて非日常的な空間への移動を好むであろうか。それは、日常的な生活や仕事の繰り返しにより、飽きが生まれ、そこから無意識のうちに「新奇なものへの興味」や「新奇なものへの欲求」というものが生まれてくるからである。そのことにより、人間は日常性から非日常性へと「離れる」心理的原動力が生まれるのである。

2-1-2 観光行動のメカニズムについて²⁾

次に観光行動についてみていく。ここで観光行動とは、観光を実際に起す行動のことである。この観光行動を起すには観光への「動機づけ」があってはじめて生まれる。「動機づけ」とは、「わたくしたちが内部にもっているさまざまな要因—たとえば、生理的要求や心理的欲求、あるいは、はっきりと意識される欲求や意識されない無意識的な欲求など—と、観光行動が向かう目標が一体となって起こる行動、あるいは、それを起させるもの」³⁾である。この「動機づけ」には、「要求」や「欲求」、「動機」というものが関係している。

■ 要求：人間の基本的な生理的欲求。つまり、基本的生理的要求。

■ 欲求：「要求」が社会的色合いをもったもの

観光行動は、「要求」が「欲求」に昇華されただけでは行われぬ。そこに、「目標」という軸が入ってきて始めて成し得るのである。

つまり、観光行動というものは、第一段階として人間人間の内に存在する「要求」が社会的欲求へと意味付けられて「欲求」に昇華されなければならない。そして、この「欲求」が「目標」に誘発されたとき、その「目標」を達成するために行う行動や、「欲求」を充た

すために行われる行為である（図２－１）。

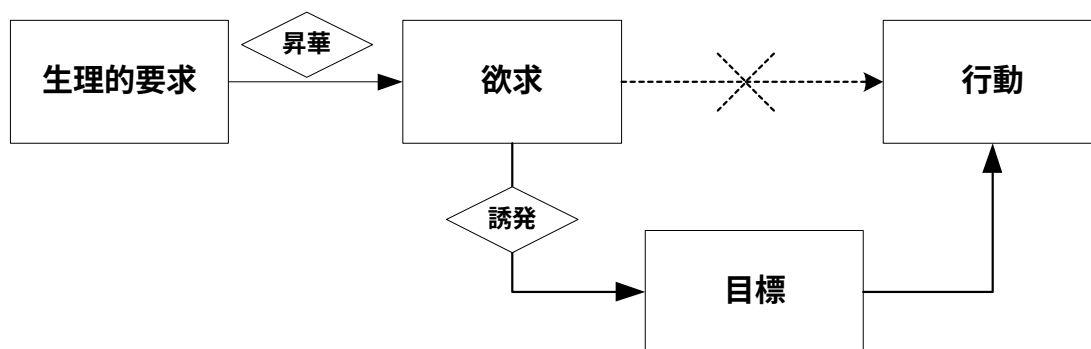


図２－１ 観光行動のメカニズム

２－１－３ 観光における「情報」と「イメージ」の役割⁴⁾

上記で人間が観光行動にいたるには、要求が欲求に昇華され、目標を誘発されてはじめて行われると述べた。この目標を誘発したり、達成したりする時に重要になってくる要素は「情報」である。人間は、何か目標ができたときにそれについて調べたり、人に聞いたりして「情報」を集める。例えば、自分の行きたい観光地について、どんな場所で、何があるのか、どういう名産品があるかを調べたり、聞いたりすることである。このような「情報」を集められると、人の頭の中にはその観光旅行についての「イメージ」が形成される。この「イメージ」が観光行動を生み出す最も重要な心理的要因なのである。

つまり、人間が観光行動を起すには、人間が観光対象に対してどのように「情報」を捉え認識し、どのような「イメージ」を作り出すのかということである。たとえ、要求が起こったとしてもそれが「観光」という次元までに高められるかどうかという事は、「情報」が鍵をにぎっており、そこから作り出される「イメージ」が決定的な役割を果たすのである。

2-2 観光の現状

次に日本における観光の現状についてみていく。

2-2-1 国内宿泊旅行の回数

国内宿泊旅行を行った回数は、国民1人当たり年間平均2.49回であり、国民全体では延べ3億1700万回と推計されている。これを旅行の目的別で見ると、「観光」が1人当たり平均1.26回（全旅行の50.6%）、「家事・帰省」が同0.63回（同25.4%）、「業務」が同0.30回（同12.2%）、「兼観光」（業務、家事・帰省、のついでに1泊以上付け加えて観光を行った場合）が同0.15回（同5.9%）となっている（表2-1）。

表2-1 国民1人あたり平均宿泊旅行回数及び宿泊数

※総理普遍：観光白書，大蔵省印刷局，p12（2003）より

事 項		10	11	12	13	14
年 間 宿 泊 旅 行 回 数	観 光	1.42 (102)	1.37 (96)	1.32 (96)	1.29 (98)	1.26 (97)
	兼 観 光	0.21 (88)	0.18 (86)	0.19 (106)	0.13 (69)	0.15 (112)
	家 事 ・ 帰 省	0.60 (107)	0.48 (80)	0.50 (104)	0.49 (98)	0.63 (129)
	業 務	0.31 (97)	0.37 (119)	0.40 (108)	0.25 (62)	0.30 (123)
	そ の 他	0.15 (136)	0.17 (113)	0.15 (88)	0.14 (92)	0.15 (105)
	宿 泊 旅 行 回 数 計	2.69 (103)	2.58 (96)	2.56 (99)	2.30 (90)	2.49 (108)
	宿 泊 観 光 旅 行 (観光+兼観光)	1.62 (99)	1.55 (96)	1.52 (98)	1.42 (93)	1.41 (99)
年 間 宿 泊 数	観 光	2.30 (105)	2.13 (93)	2.03 (95)	1.92 (95)	1.85 (96)
	兼 観 光	0.43 (75)	0.50 (116)	0.44 (88)	0.31 (69)	0.40 (130)
	家 事 ・ 帰 省	1.56 (105)	1.11 (71)	1.29 (116)	1.30 (101)	1.52 (117)
	業 務	0.71 (80)	0.98 (138)	1.24 (127)	0.53 (43)	0.72 (134)
	そ の 他	0.24 (200)	0.25 (104)	0.19 (76)	0.23 (121)	0.17 (73)
	宿 泊 数 計	5.24 (100)	4.97 (95)	5.18 (104)	4.90 (83)	4.65 (108)
	宿 泊 観 光 旅 行 (観光+兼観光)	2.73 (99)	2.63 (96)	2.47 (94)	2.23 (90)	2.24 (100)

(注) 1 国土交通省総合政策局観光部調査による。
2 () 内は前年比 (%) を示す。
3 13年の数値は、本白書の作成にあたり再集計した。

時系列で見ると、宿泊旅行全体の回数（2.49回）は、平成13年（2.30回）に比べて8%増加しており、4年ぶりに増加に転じた。目的別にみると「観光」を目的とした宿泊旅行は引き続き減少しているが「兼観光」とあわせた「宿泊観光旅行」でみると、ほぼ横ばいになっており（1.42回→1.41回）減少傾向に下げ止りの兆しが見られる（図2-2）。

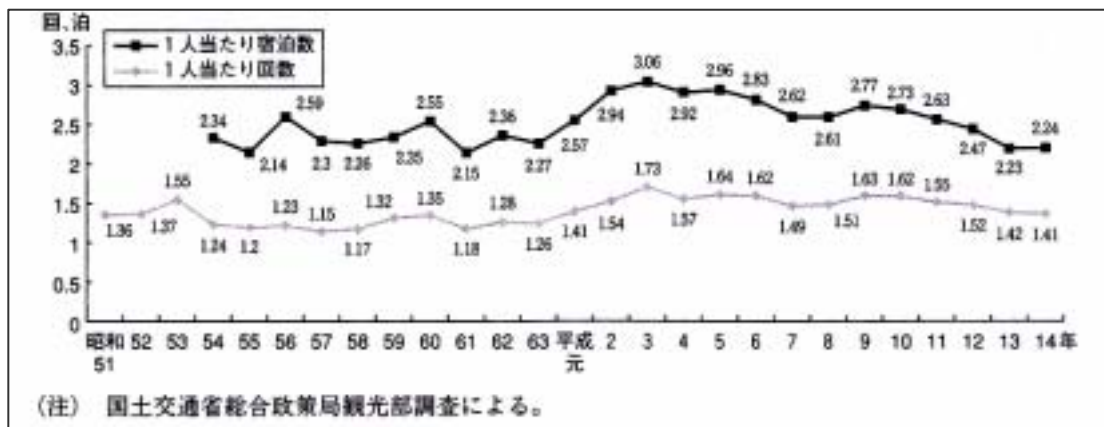


図2-2 国民1人当たりの宿泊観光旅行回数及び宿泊数の推移（平均）

※総理府：観光白書，大蔵省印刷局，p12（2003）より

2-2-2 国内宿泊旅行の宿泊数

年間を通じた宿泊日数は、国民1人当たり平均4.65泊（前年比8%増）、国民全体で延べ約5億9200万泊と推計され、前年から増加に転じた。目的別にみると、宿泊旅行の回数と同様、「観光」は引き続き減少しているが、「兼観光」を合わせた「宿泊観光旅行」でみると、1人当たり平均2.24泊とほぼ前年（2.23泊）並みであり、下げ止まりの兆しが見られる（図2-2）。

2-2-3 国民の旅行に対する意識の動向

次に国民の旅行に対する意識の動向についてみる。国民の「レジャー・余暇生活」についての満足度を見ると、男女とも「満足している」とする者の割合は1割強であるが、「まあ満足」を合わせると6割近くになり、しかも前年よりその割合は高くなっている。性・年齢別に見ると、女性の方がわずかに満足度が高い。また、男女とも20歳代が最も満足度が高く、40歳代が最も低くなる（表2-2）。

国民が今後の生活で特に重点をおきたい分野としては「レジャー・余暇生活」をあげるものが36.2%と最も高く、しかも前年よりわずかではあるが上昇している（図2-3、3-4）。

また、国民の余暇活動ごとの潜在需要を、参加希望率から実際の参加率を引いた数値を見てみると、第1位は性・年齢を問わず、「海外旅行」が最も高く、第2位が「国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）」となっており、観光旅行に対する潜在需要は依然として他の活動に比べて高くなっている。

以上のことからわかるように、人間の生活は余暇生活をいかに充実したものに、また楽しむかという事に重点が置かれる傾向にある。

表2-2 現在の生活に対する満足度－レジャー・余暇生活－

※総理普遍：観光白書，大蔵省印刷局，p21（2003）より

	該当者数	満足	満足している	まあ満足している	不満	やや不満	不満だ	どちらともいえない	わからない
	人	%	%	%	%	%	%	%	%
総数	7,247 (7,080)	58.9 (56.3)	11.0 (10.5)	47.9 (45.8)	37.1 (39.5)	25.4 (26.7)	11.7 (12.8)	3.2 (3.2)	0.8 (0.9)
〔性〕									
男性	3,352 (3,233)	57.2 (54.8)	10.0 (9.7)	47.3 (45.2)	39.0 (41.0)	27.0 (28.1)	12.0 (12.9)	3.0 (3.2)	0.8 (1.0)
女性	3,895 (3,847)	60.3 (57.6)	11.8 (11.2)	48.5 (46.3)	35.5 (38.2)	24.1 (25.6)	11.4 (12.7)	3.3 (3.3)	0.9 (0.9)
〔性・年齢〕									
（男性）									
20～29歳	404	64.1	16.3	47.8	33.2	23.8	9.4	2.5	0.2
30～39歳	502	58.0	7.8	50.2	40.0	30.9	9.2	1.4	0.6
40～49歳	556	48.9	7.7	41.2	48.4	33.6	14.7	2.2	0.5
50～59歳	690	53.5	9.0	44.5	43.5	29.0	14.5	2.8	0.3
60～69歳	683	60.5	11.6	48.9	35.9	24.5	11.4	3.1	0.6
70歳以上	517	60.9	8.9	52.0	30.4	19.3	11.0	6.2	2.5
（女性）									
20～29歳	435	67.4	20.2	47.1	30.6	20.5	10.1	1.1	0.9
30～39歳	628	58.3	9.2	49.0	40.6	30.1	10.5	1.0	0.2
40～49歳	664	55.1	9.3	45.8	42.5	29.2	13.3	1.8	0.6
50～59歳	832	57.9	9.3	48.7	38.7	26.2	12.5	3.0	0.4
60～69歳	759	64.0	14.5	49.5	31.2	20.2	11.1	4.2	0.5
70歳以上	577	61.5	11.3	50.3	26.7	16.5	10.2	8.7	3.1

(注) 1 内閣府大臣官房政府広報室「国民生活に関する世論調査」(14年6月)による。
2 ()内の数字は、平成13年9月に行った同調査の結果。

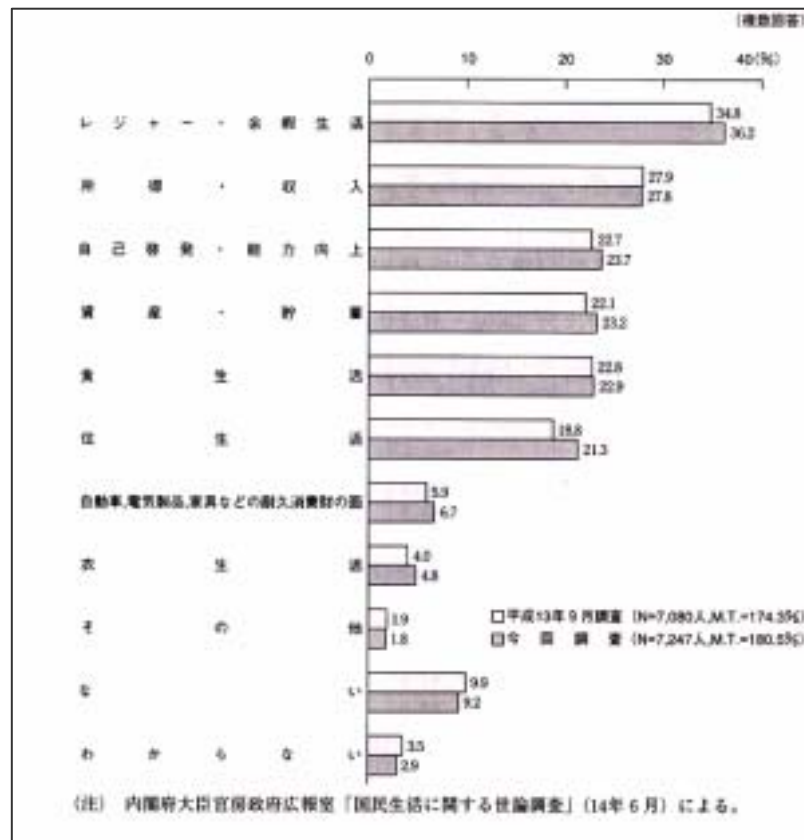


図2-3 今後の生活の力点

※総理普遍：観光白書，大蔵省印刷局，p22（2003）より

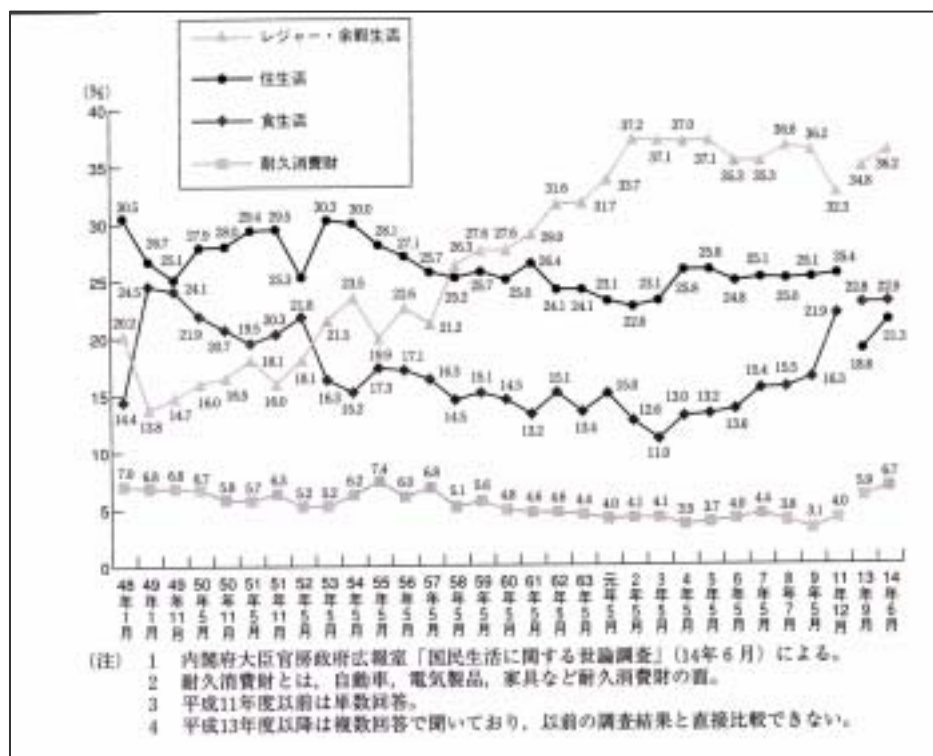


図2-4 今後の生活の力点の推移

※総理普遍：観光白書，大蔵省印刷局，p23（2003）より

2-2-4 観光と環境について

次に観光と環境の関係についてみる。観光では「持続可能な観光」と呼ばれる、持続可能な開発という概念に基づいた観光形態が主流になっている。この持続可能な開発の概念は1992年の地球サミットの中心的な考えである「将来の世代のニーズを満たす開発」の事であり、地球環境保全の取り組みにおいても不可欠なキーワードである。観光学辞典ではこの「持続可能な観光」を、「**環境と観光開発を相反するものとしてではなく、互いに依存するものとして捉え、環境保全してこそ将来にわたっての観光開発が実現できるとする概念**」⁵⁾であると定義している。

この持続可能な観光の概念の普及や近年の自然環境の保全・保護に関する関心の高まりなどから、少人数で自然や野生生物とのふれあいを通じて自然保護に対する理解や認識を深めていく「エコツーリズム」に関心が高まっている。さらに、自然志向の高まりや、田舎暮らしなどの関心の高まりを背景として、旅行業者と各地域の観光協会、農林漁業者や農協などとの連帯により、農山漁村地域を中心に自然、文化、人々との交流を目的とした滞在型の余暇活動である「グリーン・ツーリズム」への関心も高まっている。

このような、環境に配慮する観光が関心を集めるようになったことにより、修学旅行にも変化が現れた。今まで、文化遺産の見学が中核となっていた修学旅行が、農業体験や自然体験などの体験学習を行う比重が高まってきたのである。

2-3 宿泊施設の現状

2-3-1 宿泊施設と環境配慮について

2-2-4で観光の分野でも環境に配慮する傾向にあるという事は述べた。このような事は、観光と密接な関係にある宿泊施設にとっても例外ではない。実際に様々な面で環境に配慮した取り組みを行う宿泊施設やそれを認定する団体や制度は増加してきている。

例えば、環境認証のISO14001を取得する宿泊施設や、ECOTELという宿泊施設専門の環境認証を取得する宿泊施設も出てきている。また、地方自治体の中には環境配慮型宿泊施設に対する認証モデル事業を行っている所もある。さらにグリーン購入ネットワーク（GPN）では環境に配慮した宿泊施設を積極的に利用してもらうために、エコチャレンジという宿泊施設を独自の評価基準で評価するという事を行っている。そして、インターネット宿泊予約サイトと提携しそれをネットに公開するという事も行っている。

以上のような例からもわかるように、宿泊施設を取り巻く環境配慮の状況は進んできているのである。

次に環境と宿泊施設に関する既往研究を見てみる。京のアジェンダ 21⁶⁾では宿泊施設の環境対策に対する宿泊客の意識調査を行い、「宿泊客の環境意識は全般的に高い事がわかった。しかし、環境意識と行動との間には、現実にはずれが存在する。今後の宿泊施設における環境対策は、顧客の高い環境意識を汲み上げて支えていくこととなり、新しい満足を満たすことにつながると思われる」⁷⁾と論じている。

深井らは⁸⁾、宿泊施設と環境の問題を廃棄物に焦点を当て、宿泊施設の廃棄物問題の現状把握をおこなう研究を行った。そこで「宿泊施設における廃棄物問題の重要性」を論じている。

溝口は⁹⁾、宿泊施設の中でもホテルを対象とし、ホテルの資源、エネルギー消費量及び環境負荷度を把握しエネルギー消費削減、環境対策効果というエネルギーに焦点を当てた研究を行った。そして「現在ホテルでは、資源、エネルギー消費、環境問題に関しては問題があり、そのための対策を講じなければならない」¹⁰⁾ということを論じている。

星野は¹¹⁾、ホテルを対象に環境配慮行動に至るまでの意思決定のあり方について廃棄物問題を用いて把握する研究をおこなっている。そこでホテルの売上規模と環境行動の有無について論じている。また、星野はホテルの環境問題として、廃棄物問題を優先課題と捉え、その中でも廃棄物全量の約半分を占める有機性廃棄物の管理についての研究¹²⁾も行っている。

筆者は¹³⁾、京都市内の宿泊施設を対象として、宿泊施設における環境配慮の取り組みの現状を把握し、それを評価するためのシステムを提案する研究を行った。そこで、「京都市内における宿泊施設において環境配慮をしていない施設は皆無であるが、施設によって取り組みレベルに差がある事。また、環境配慮における取り組みには、取り組み易いものと、取り組みにくいものがある」¹⁴⁾ということを論じている。

以上の既往研究を見ても、宿泊施設の環境問題とは廃棄物やエネルギーなどのハード面

に焦点を当てたものがほとんどであり、「宿泊施設の環境配慮＝ハード面での取り組み」という図式が強い。また、宿泊施設と環境については研究されはじめた段階である。

次に宿泊施設での環境配慮に対する取り組みや制度、団体について説明する(表2-3)。

表2-3 環境認証の種類と内容

環境認証の種類	内容
■ISO14001シリーズ	ISOが作っている国際規格で、環境管理システム、環境監査、環境ラベル、環境パフォーマンス評価、ライフサイクル・アセスメントなどの分野にわたる。しかし、これらの基準は管理システムを評価するものであって、実施内容を規定するものではない。
■ECOTEL	米国の環境コンサルティング会社『HVSエコサービス社』による認証制度で、第三者的立場からそのホテルが環境にやさしいことを保証するものである。
■グリーングローブ	企業が次の3項目を遂行するための手段を示す非営利団体である。 ①世界的なガイドラインに則って環境改善を進める ②環境管理と効率の良い運営方法のアドバイスを得る ③マークを使用し、環境関連の認定を獲得する事で社会にアピールする
■グリーンリーフ	グリーンリーフは、環境に配慮した事業を実践していると認める事により、その規約への関心度を高め、サポートする目的で開発された。
■グリーン・キー	デンマークにおけるグリーン・キー協会が認定する環境に良いホテル・宿泊施設を認定するものである。グリーン・キーは55項目からなっていて、3つの分野に分かれている。必須項目、達成予定項目、努力項目である。

(1) ISO14000 シリーズ¹⁵⁾

ISO(International Organization for Standardization の略)つまり、国際標準化機構は、世界共通の規格・基準などを定める目的で 1947 年に設立された。

ISO14000 シリーズは、ISO が中心となって規格作りを行っている国際規格で、環境管理システム、環境監査、環境ラベル、環境パフォーマンス評価、ライフサイクル・アセスメントなどの分野にわたる。これらは、国際貿易を促進しつつ、地球環境の保護を行う管理システム構築を目的とした世界共通の規格・基準である。ただし、これらの基準は管理システムを評価するものであって、実施内容を規定するものではない。

(2) ECOTEL¹⁶⁾

ECOTEL とは、米国に本拠を置く宿泊施設専門の環境コンサルティング会社、『HVS エコサービス社』による認定制度であり、第三者的立場からそのホテルが環境にやさしいことを保証するものである。HVS エコサービス社は、実践的で、費用効果のある環境プログ

ラムを作り、既存の、また開発途中のホテル、リゾート施設、ロッジの環境対策改善を手助けしている。現在（2000 年）までに 1000 にのぼるホテルや宿泊施設がこの認定申請を行っているが、そのうちわずか 39 施設しか認定されていない。

ECOTEL 認定は、環境保護の観点から最も重要な分野を 5 つのグローブ（地球の意）として規定し、それぞれの分野で必要条件を満たす事によって 1 つから 5 つのグローブを得られる仕組みになっている。

【5 つのグローブ】

- 環境保護への取り組み姿勢
- 固形廃棄物の管理
- 省エネルギー
- 節水
- 従業員教育とコミュニティ参加

(3) グリーングローブ¹⁷⁾

母体組織は 1993 年に設立された WTTC（ワールドトラベル&ツーリズムカOUNシル）である。WTTC は世界的な連合組織で、旅行・観光業界の最高経営責任者 70 人で構成されている。グリーングローブは企業が次の三項目を遂行するための手段を示す非営利団体が WTTC とは別組織になっている。

- ① 世界的なガイドラインに則って環境改善を進める
- ② 環境管理と効率の良い運営方法のアドバイスを得る
- ③ グリーングローブのマークを使用し、環境関連の認定を獲得する事で社会にアピールする。

会員は環境セルフアセスメント調査を実施し、一年後までに環境改善策を遂行するとの公約にサインしなければならない。グリーングローブは個々の改善プランや実現可能なゴール設定をアシストしている。

(4) グリーンリーフ¹⁸⁾

母体組織は 1994 年に設立した PATA（パシフィックアジア・トラベルアソシエーション）である。PATA は 1992 年に環境に責任ある環境事業のために組織規約を導入した。グリーンリーフは、環境に配慮した事業を実践していると認める事により、その規約への関心度を高め、サポートする目的で開発された。グリーンリーフを得るにはまず一般及び分野別（約 20 種類）の調査表に記入し、PATA 本部がその調査表を評価する。グリーンリーフの認定には、それぞれのフォームで最低 50%、合わせて平均 60%のスコアを獲得する必要がある。

ある。第三者による監査は行われない。

(5) グリーン・キー¹⁹⁾

グリーン・キーとはデンマークにおけるグリーン・キー協会が認定する環境に良いホテル・宿泊施設を認定するものである。グリーン・キーは55項目からなっていて、3つの分野に分かれている。必須項目、達成予定項目、努力項目である。必須項目はグリーン・キーが認定されるその日に基準を満たしておかなくてはならないものであり、達成予定項目は特定の期間内に規定を満たせばよい。最後の努力項目は、その中の一部を満たせばよい事になっている。

以上のような環境認証制度は、宿泊施設のハード面に関する取り組みが多い。(ここでのハード面とは施設の設備やリサイクルなどの取り組みの事を指し、ソフト面とは従業員教育やゲストへの説明のような事を指す。)

その要因として、ハード面の取り組みは宿泊施設のメリットに繋がり易いからであると考ええる。なぜなら、ソフト面の取り組みに比べると、ハード面の取り組みは、取り組んだ結果が、コスト削減のように目に見えるメリットが得やすいからである。

このように、宿泊施設での環境配慮の取り組みは、ハード面の取り組みに偏っているのではないかと考える。しかし、環境を総合的に配慮する事を考えると、ハード面の取り組みだけではなく、ソフト面も必要であると考ええる。

2-3-2 宿泊施設における環境配慮の類型について

図 2-5 は宿泊施設における環境配慮の要素がどの領域を満たしているかを表した図である。この図は、ハード面、ソフト面、ホスト側、ゲスト側という4つの要素から出来ている。つまり、ハード面、ソフト面という宿泊施設の要素の軸と、ホスト側に関係があるのか、ゲスト側に関係があるのかという軸で構成されている。

ハードーホストの領域はごみのコンポスト化や水のリサイクル、コージェネレーションなどの設備の設置などが含まれる。ソフトーホストの領域は、従業員への環境教育や、規則を設けるというようなことである。また、ハードーゲストの領域とは、カードキーや、タイマーで消える電気、トイレの流水音装置などのことであり、ソフトーゲストの領域とは、ゲストに対してホスト側が取り組んでいる環境配慮の取り組みを提示したり、説明したりして伝えるということである(表2-4)。

表 2－4 環境配慮の 4 領域の取り組み内容

領域	取り組みに内容
■ハードーホスト	ごみのコンポスト化、水のリサイクル、コージェネレーションなどの設備の設置
■ソフトーホスト	従業員への環境教育や規則など
■ハードーゲスト	カードキー、タイマーで消える電気、トイレの流水音装置など
■ソフトーゲスト	環境配慮の取り組みを提示したり、伝えるなど

2－2－1 では現在の宿泊施設における環境配慮や認証制度について述べた。これらの環境配慮は主に図 2－5 の中の、ハードーホストの領域、ソフトーホストの領域という、宿泊施設側（ホスト側）のみの環境配慮である事が多い。しかし、宿泊施設の中には図 2－6 のようにハードーゲストの領域も満たしている場合がある。しかし、宿泊施設ではゲストに負担を負わせたくないとの理由から、ハードーゲストの領域や、ソフトーゲストの領域あまり取り組まれていないのが現状である。

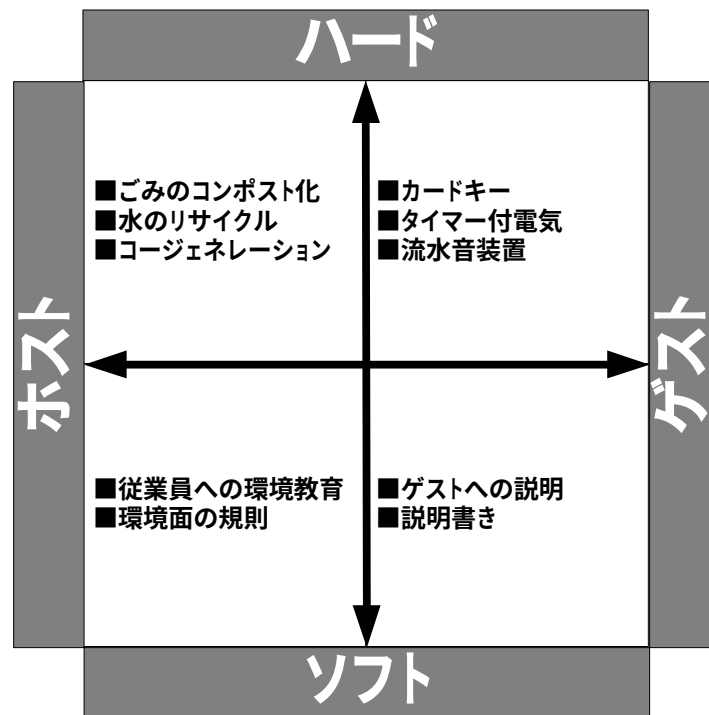


図 2－5 宿泊施設における環境配慮の 4 領域

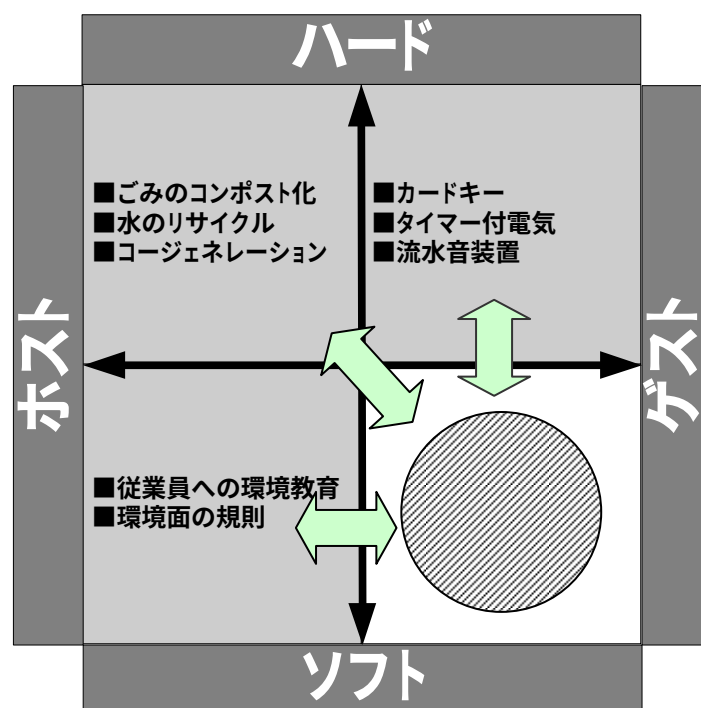


図2-6 現在、環境配慮を行う宿泊施設が主に取り組む領域（グレーの領域）

本研究では、図2-6では満たしていないソフトーゲストの領域（図2-6のマル印の領域）が今後の宿泊施設の環境配慮にとって重要であると考えます。

このソフトーゲストの領域とは、ゲストに対してホスト側が取り組んでいる環境配慮の取り組みを提示したり、説明したりして伝えるということである。現状としては、あまり取り組まれていない。また、取り組まれていても、張り紙程度であることが多い。

このソフトーゲストの領域が重要であると考えるのは、京のアジェンダの言う「今後の宿泊施設における環境対策は、顧客の高い環境意識を汲み上げて支えていくこととなり、新しい満足を満たすことにつながると思われる」²⁰⁾に基づいており、取り組んでいる環境配慮を理解してもらう事を通じて、ゲストの環境意識に刺激を与える事が出来るのではないかと考える。また、近藤は「**人間主体がライフ・スタイルを自主的に変革していく契機には、思想あるいは先行する生活イメージが必要である。現代では、ライフ・スタイルは固定的に決定されるものではなく、学習や模倣によって変わり得るものと考えられる**」²¹⁾と述べている事からも、近年示唆されているエコロジカルなライフ・スタイルへの転換の足掛かりになることも考えられる。

また、ホスト側について考えると、このソフトーゲストの領域に取り組む事によって、漠然と環境配慮の取り組みをこなすのではなく、取り組みを振り返る、ゲストに伝えるための工夫をするなどの行動をとると思われる。このことは、環境との関わりを再認識したり、考えたりする事につながり、ホストの環境意識を向上させると考える。

2-4 観光と宿泊施設についてのまとめ

第2章では、観光行動のメカニズム、観光の現状、観光と環境、宿泊施設と環境について述べてきた。以下にこれらの事を簡単にまとめる。

観光行動を起すには、観光への「動機づけ」があってはじめて生まれる。この「動機づけ」には、「要求」や「欲求」、「動機」というものが関係している。また、観光行動は「要求」が「欲求」に昇華されただけでは行われない。そこに、「目標」という軸が入ってきて始めて成し得るのである（図2-1）。この目標を誘発したり、達成したりする時に重要になってくる要素は「情報」である。つまり、「観光」という次元までに高められるかどうかという事は、「情報」が鍵をにぎっており、そこから作り出される「イメージ」が決定的な役割を果たすのである。

次に、観光の現状としては、国内宿泊旅行を目的別にみると「観光」を目的とした宿泊旅行は引き続き減少しているが「兼観光」とあわせた「宿泊観光旅行」でみると、ほぼ横ばいになっており減少傾向に下げ止りの兆しが見られる。また、国民が今後の生活で特に重点をおきたい分野としては、「レジャー・余暇生活」をあげるものが36.2%と最も高く、しかも前年よりわずかではあるが上昇している。以上のことから、人間の生活は余暇生活をいかに充実したものに、また楽しむかという事に重点が置かれる傾向にある。

次に、観光と環境については、「持続可能な観光」と呼ばれる、持続可能な開発の概念に基づいた観光形態が主流になっている。さらに、この持続可能な観光の概念の普及や近年の自然環境の保全・保護に関する関心の高まりなどから、「エコツーリズム」に関心が高まっている。さらに、自然志向の高まりや、田舎暮らしなどの関心の高まりを背景として、「グリーン・ツーリズム」への関心も高まっている。このように、観光業界でも環境を配慮したり、観光をメインとしたりする観光が行われている。

次に、宿泊施設と環境の現状としては、環境認証のISO14001を取得する宿泊施設や、ECOTELという宿泊施設専門の環境認証を取得する宿泊施設も出てきている。また、地方自治体の中には環境配慮型宿泊施設に対する認証モデル事業を行っている所もある。以上のように、宿泊施設を取り巻く環境配慮の状況は進んできている。しかし、宿泊施設の環境配慮の現状では、廃棄物やエネルギーなどのハード面に焦点を当てたものがほとんどであり、「宿泊施設の環境配慮＝ハード面での取り組み」という図式が強いのが現状である。

そこで、本研究では宿泊施設における環境配慮の取り組みを、ハード面、ソフト面という宿泊施設の要素の軸と、ホスト側に影響があるのか、ゲスト側に影響があるのかという軸で構成している、「宿泊施設における環境配慮の4領域（図2-5）」なるものを作成した。そして、現在、宿泊施設における環境配慮の取り組みにおいて、あまり取り組まれていないソフト・ゲストの領域の取り組みが、今後の宿泊施設における環境配慮に重要であると考え、研究を進めていく事とする。

第2章 註及び引用・参考文献

- 1) 原英種・宮原和子：観光心理学を愉しむ ツーリズム・サイコロジー，ナカニシヤ出版，pp5－7，2001
- 2) 宮原英種・宮原和子：前掲書， pp27－32，2001
- 3) 宮原英種・宮原和子：前掲書， p28
- 4) 宮原英種・宮原和子：前掲書， pp32－34，2001
- 5) 長谷政弘：観光学辞典，同文館， p12，1997
- 6) 京のアジェンダ 21：京都市・市民・事業者が連携して環境まちづくりを目指すための円卓会議
- 7) 京のアジェンダ 21 エコツーリズムワーキンググループ：環境にやさしい宿泊施設へ「宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート」の結果報告と戦略提案，（2000）
- 8) 深井純一：京の岐路－環境にやさしい宿泊施設をめざして－，立命館大学産業社会学部，（2000）
- 9) 溝口和宏：ホテルにおけるエネルギー消費・環境対策に関する研究，京都大学大学院エネルギー科学研究科エネルギー社会・環境科学専攻修士論文，（1999）
- 10) 溝口和宏：前掲書， p62
- 11) 星野朋子：ホテルにおける環境問題への対応の意思決定，立教観光学研究紀要第 1 号，pp53－60（1999）
- 12) 星野朋子：ホテル産業における有機性廃棄物管理の基本的枠組み，立教観光学研究紀要第 2 号， pp43－50（2000）
- 13) 仁賀崇之：宿泊施設の環境配慮に関する研究－京都市内の宿泊施設を対象として－，滋賀県立大学環境科学部卒業論文，（2001）
- 14) 仁賀崇之：前掲書
- 15) ヒルトン大阪 広報部，2001，私信
- 16) 同上
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) HOTEL MIWA GROUP ，2002，私信
- 20) 京のアジェンダ 21 エコツーリズムワーキンググループ：前掲書， p24
- 21) 近藤隆二郎：環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究，大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文， p1（1994）